

岡山県大学図書館協議会平成 27 年度研修会報告書

1. 開催日時：平成 28 年 2 月 29 日（月）13：00～17：00
2. 場 所：就実大学・就実短期大学図書館
3. 参加者：県内 17 大学・短期大学 24 名
4. 司 会：山本雅子（ノートルダム清心女子大学附属図書館）
5. 書 記：市地七実子（岡山大学附属図書館）
松本幸子（吉備国際大学・吉備国際大学短期大学部附属図書館）
6. テ ー マ：新入生オリエンテーションについて

（1）開会

就実大学・就実短期大学図書館長 柴田隆司氏より開会の挨拶があった。

（2）講演：『「つくり・ひらく」情報リテラシー教育実践』

講師：石川敬史氏（十文字学園女子大学 人間生活学部 文芸文化学科 准教授）

新入生オリエンテーションを中心とした情報リテラシー教育実践について、石川氏作成の配布資料をもとにご講演いただいた。

1. 自己紹介

理工系の大学図書館、学校法人の総合企画室での勤務を経て、現在十文字学園女子大学で司書課程を担当し、専門は近現代の日本図書館史で、主に図書館サービスの歴史を研究している。

2. 今日の目標（問題提起）

今日の目標は、「創り」、「拓き」、そして「実行」へつなぐことで、情報リテラシー教育を豊かにしていくことである。「創る」では、そもそも何のために情報リテラシー教育を行っているのかという、理念を考えていく。「拓く」では、情報リテラシー教育を通して、何をどのように伝えていけば良いのかを考えていく。

3. まずは考えよう！

なぜ図書館で情報リテラシー教育を行う必要があるのだろうか。情報リテラシー教育は実施すること自体が目的ではなく、あくまである目的を実現するための方法である。結論から言うと、情報リテラシー教育の考え方は、あるべき姿と現状の間にあるギャップを埋めていくことである。それでは、そのあるべき姿とは何なのか、何のために情報リテラシー教育を行うのかを、まずは「創る」ということに焦点をあてて考えていく。

4. 何のための情報リテラシー教育か？～基本的事項から～ 【創る①】

情報リテラシーという大きな枠組みの中に図書館利用者教育がある。

日本図書館協会の「図書館利用教育ガイドライン」は、図書館の理念と目標、それを実現するための具体的な方法が体系的に整理されている。これを見ると、図書館の新生オリエンテーションやガイダンスはそれぞれ単発で行われているのではなく、一連の教育活動の中に位置づけられているということになる。

ACRL (Association of College and Research Libraries) の「高等教育のための情報リテラシー能力基準」は、情報リテラシー教育によってどのような学生になっていたかという、学生のあるべき姿を明確にした基準である。このような学生を育てるために、図書館は何をすれば良いのかという考え方である。

5. 何のための情報リテラシー教育か？～教育の動向からの視角から～ 【創る②】

情報リテラシー教育の方向性を考えるには、教育という枠組みの中、全体の施策・ビジョンがどのようになっているかを押さえる必要がある。

まず現代高等教育政策の流れを答申に注目して追って行くと、2012年の以前の答申では、大学教育の結果、学生は何ができるようになっていくべきかというアウトカムズが書かれていた。2012年の質的転換答申から内容が少し変わり、大学全体として、あるべき学生を育成するためにはどんな教育プログラムが必要なのかが書かれるようになった。例えばFDについても、個々人の方法の改善していくことよりも組織的な改善に重きを置くようになり、教育プログラムをどう改善していくかという方向性になっている。

さらに広い視点から教育というものをみていくと、国が目指すべき教育施策がアウトカム・ベースで書かれた「第2期教育振興基本計画」、産業界が21世紀に生きる子どもたちに期待するスキル「21世紀型スキル」がある。IFLAが宣言した「モスクワ宣言」では、情報リテラシーとは社会を切り開くための基盤、社会参加の一步であるといっている。

しかし、国や高等教育の施策で書かれているような、教育の結果何ができるようになるのかというアウトカムズだけではなく、主権者として生きる上で必要不可欠な、メディアに対する批判的思考能力、「メディア・リテラシー」を考えることも重要である。「メディア・リテラシー」とは、アウトカムズよりも、そこに到達するまでのプロセスを重要視している。つまり、成果を生む方法や段階を定期的に見直して考えることも重要である。

以上のように学生が何のために情報リテラシーを身に着けなければならないのかを広く考えていくと、最終的には、社会を生き抜くため、市民生活や自治の基盤、民主主義の形成といったことに行き着く。

6. 実践を拓くために…どのように情報リテラシー教育をデザインするか？ 【拓く①】

新入生オリエンテーションを企画する際、我々は教える内容を重視しがちだが、教育プログラムの連続性や学生生活を踏まえて、学生にどう伝えていくかを考えることが必要である。

職員が図書館の有用性を一方的に説明しても、学生が何のために図書館が必要なかわからなければ無意味である。職員が教えるのではなく、学生に考えてもらう機会をつくり、学生自身に図書館の有用性に気づいてもらう仕掛けが必要である。

情報リテラシー教育を行う上で重要なのが、手段と目的を混同しないことである。情報リテラシーや高等教育の目指すべき方向性を踏まえた上で、それをどう実現させていくかを考える必要がある。

7. 市民の図書館活用のストーリーとは？？ 【拓く②】

社会一般で図書館での情報収集はどのような位置づけをされているのだろうか。現在はインターネットで情報収集が容易にできるようになったこともあり、情報収集よりもむしろその後の活動に重点がおかれてきているようである。図書館での情報収集がかつてほど重要視されない中で、図書館の優位性とは何かを新入生オリエンテーションで学生に理解してもらう必要がある。

8. おわりに

情報リテラシー教育の原点は、どんな学生を育てたいのかということである。その時に振り返る必要があるのは、各大学のビジョンや学生育成方針である。さらに職員の中でも新入生オリエンテーションとは何なのか、なぜ必要なのかという方向性を共有し、学生の学びの文脈を踏まえて新入生オリエンテーションを考えていくべきである。

情報リテラシー教育のさらなる源流をたどっていくと、図書館の理念に行き着く。図書館の理念は民主主義の維持という、情報リテラシーの考え方と近い。図書館の理念が、情報リテラシーの原点、ありたい姿、方向性になるのではないか。

(3) 質疑応答

- Q. ガイダンスのアンケートの評価が非常に良いが、あまり参考になるアンケートがとれていないように思う。学生の本音を引き出す方法があれば教えてほしい。(美作大学)
- A. 学生は比較的良いようにアンケートをつける傾向がある。学生の本音を引き出す方法として、2つの方法がある。1つ目は、学生に直接聞く方法である。学生に声をかけて、ガイダンスの良かったところ、悪かったところを聞く。2つ目は、日にちをおいてアンケートをとる方法である。憶えている人が多ければ、印象に残ったということになる。

(4) 実演

就実大学・就実短期大学図書館の岸本京子氏（研修委員）により、平成28年度から実施予定の新入生オリエンテーションの実演があった。参加者は、まずパワーポイントによる図書館についての説明を受けた後、グループに分かれて図書館の中でオリエンターリングを行った。なお、時間の都合上、オリエンターリングは計画している内容と少し異なると説明があった。実演内容は以下の通りである。

<実演内容>

○パワーポイントによる説明（20分）

パワーポイントを使って、以下のように図書館についての説明があった。

① 就実大学・就実短期大学図書館について

図書館の建物、座席数、蔵書数など、図書館の概要について説明があった。

② 図書館でできること

図書館サービスを「学ぶ」、「くつろぐ」、「参加する」の3つの内容に分けて説明があった。それぞれの内容については、以下の通りである。

「学ぶ」…本の探し方、本の借り方、図書館内での自習の仕方について

「くつろぐ」…視聴覚資料があるコーナー、会話や飲食ができるコーナー等について

「参加する」…図書館サポーター、ブックハンティング、ミニミニ講座について

③ さいごに

図書館内のマナーについて説明があった。

○オリエンターリング（20分）

参加者はA・B・C・Dの4グループに分かれて、図書館内でオリエンターリングを行った。1グループごとに課題用紙が1枚配られ、そこに書かれた以下の2つの課題に沿って図書館内を歩いた。

① 2階 OPAC で蔵書検索をしよう

2階の OPAC コーナーで就実大学・就実短期大学図書館の職員から OPAC の使い方についての説明を受けた後、グループごとにキーワードを決めて蔵書検索を行い、気になる図書の書名と所在情報を課題用紙にメモした。

② 3階にどんな本があるか探してみよう

3階に移動し、実際に図書館内を回りながら、図書館サポーター（学生アルバイト）から図書館3階の施設について説明があった。その後、課題用紙に書いてある図書を探し、カウンターへ持って行き貸出手続きを体験した。

(5) グループ討議・発表

参加者はA・B・C・Dの4グループに分かれ、研修会事前アンケートの集計結果にもとづき、グループ討議と発表を行った。

<テーマ>

利用者を惹きつけるオリエンテーションとは？

<グループ討議・発表の流れ>

研修会事前アンケートの回答で多く挙げられていた、困っていること3点と、その他グループで挙げられた事項について、解決策を考える。その後、グループごとに話し合った内容を発表する。グループ討議の時間は20分、発表は各グループ2分とした。

<発表>

グループ討議の結果、発表で以下のような意見が出された。

○時間が足りないことについて

- ・内容を詰め込みすぎない。細部は省いて、省いた内容は後日講座を行う、または別で時間をつくる。ただしこの場合だと、全員の参加が難しいという問題点がある。

○人手が足りないことについて

- ・学生に協力してもらう。
- ・学生図書委員に声をかけてみる。

○学生の反応が少ないことについて

- ・内容を詰め込みすぎない。
- ・パワーポイントに写真を活用する。
- ・学生に実際に体験、参加させて興味をもたせる。
- ・学生が興味を持つことを使って説明する。

○職員側が緊張することについて

- ・話すことのマニュアルを作り、事前準備をしっかりとる。

最後に、研修会事前アンケートの集計結果のうち、新入生オリエンテーションの気になる点として出された質問について実施館より以下の回答がなされた。

- Q. 新入生オリエンテーションを複数名で担当している館はマニュアルを作成しているか。
- A. オリエンテーションの際使用するパワーポイントの説明原稿を作成している。(川崎医療福祉大学)
- A. 上記に加えて、館内ツアー用の原稿を作成している。(ノートルダム清心女子大学)

Q. オリエンテーションに限らず、図書館利用案内に学生が説明する側として関わっている図書館があるか。それはどのような形で関わっているのか。

- ・有償か無償か？
- ・学生に対する事前の指導や打合せなどは？
- ・図書館員がどこまで関与しているのか？

A. 新入生オリエンテーションを職員全員で行っているため、その間のカウンターを普段アルバイトに来ている学生に無償でお願いしている。その他、図書館サポーターや図書委員などに、オリエンテーションの中で活動内容を報告してもらっている。打合せについてはあまり細かくは行っていない。(中国学園大学)

A. 有償で行っている。打合せについては、3月末に館内ツアーの流れを実際に体験してもらっている。図書館員の関与については、マニュアルも図書館員が作成しており、全てにおいて関与している。(ノートルダム清心女子大学)

(6) 閉会

司会者 山本雅子氏(研修委員長)より、閉会の挨拶があった。

(7) S館見学

就実大学・就実短期大学図書館の岸本京子氏(研修委員)の案内により、平成27年3月に完成したS館の見学を希望者のみ行った。

以上